社会科（歴史的分野）学習指導案

１　単元名

「第二次世界大戦と日本」

２　単元について

（１）単元観

中学校社会科学習指導要領歴史的分野の内容「（１）近代の日本と世界　ア　次のような知識を身に付けること　（カ）第二次世界大戦と人類の惨禍」の　内容の取扱いについては、「国際協調と国際平和の実現に努めることが大切であることに気付かせるようにすること」とある。それをふまえて、日本が第二次世界大戦へと向かう過程やその要因を捉えるだけでなく、戦争の惨禍を再び繰り返さない国家・社会の形成者としての意識の醸成や、戦争について主体的にかつ深く考えられるような学習活動を展開することが大切である。

本単元は、「（カ）第二次世界大戦と人類の惨禍」とあるように、「第二次世界大戦」という社会的事象がもたらした人類の負の歴史の部分を扱う。イギリスやアメリカなど世界恐慌を乗り越えた国家が、第一次世界大戦の反省から生み出した国際協調の流れに反し、侵略戦争を仕掛ける日独伊三国の暴走を食い止めるという構図で第二次世界大戦は勃発した。領土の取り合いでなく、世界の平和秩序の維持が目的だったため、結果として勝利した国すら得たものはほぼなかった。それどころか、当時の世界人口の２．５％以上の人々が被害を受けるなど、この戦争に関わった国々に残した傷跡は大きなものとなったことから、現在に至るまで世界中で「人類の苦い教訓」として語り継がれてきた戦争ではないだろうか。そもそも第二次世界大戦は、世界恐慌を発端とする日独伊三国の経済状況や国民生活の悪化が引き金となって勃発しているため、帝国主義を掲げる国家同士の衝突を主な原因として勃発した第一次世界大戦とは性質が異なっていると考えられる。第一次世界大戦については、アフリカ大陸進出をねらい、３Ｂ政策を推し進めるドイツと、アジア進出をねらい、３Ｃ政策を推し進めるイギリスとの間の対立に、「ヨーロッパの火薬庫」と呼ばれたバルカン半島の民族対立が相まって激化してしまった、いわば帝国主義の行き過ぎが生みだした戦争である。その反省から、戦勝国であるアメリカやイギリスが、ワシントン海軍軍縮条約に始まる戦艦数の削減や日英同盟の解消を通して、日本などの帝国主義に勢いがかった国々を牽制し始めた。そして、着々と日本を含めた各国が「軍縮」を進める中で、経済力をつけたアメリカが太平洋地域の秩序に関してイニシアチブを手に入れ、アメリカを中心とするワシントン体制が強固なものとなっていく。一方で、敗戦国であるドイツは戦争の責任をとるべく、戦勝国に対し多額の賠償金を支払った。これがハイパーインフレーションを引き起こし、国内の経済が悪化の一途をたどる大きな要因となり、帝国主義で植民地獲得を争った欧米列強の間に格差が生じることとなった。さらにその後、

アメリカの株価暴落から始まった世界恐慌では、多くの植民地を有するイギリスやフランスではブロック経済を行い、恐慌を乗り切ったものの、ベルサイユ条約に則って植民地を召し上げられたドイツや、鉱産資源に恵まれない日本は恐慌の影響を大きく受けてしまう。このことから、第一次世界大戦の結果や植民地の有無が世界恐慌の対応に大きく影響してしまったといえる。日本は世界恐慌を受け、経済発展の源であった外国への輸出中心の産業に依存することが困難となったため、諸外国に対抗できる船舶、兵器、織物などの製造をすべく、資源が豊富である満州に進出を図り、イギリスやフランスと同様にブロック経済圏の形成をねらうこととなる。ただ、満州進出には陸軍や海軍という軍部の力が必須であるが、当時の日本の政治は国際協調の流れに傾き始めており、浜口雄幸首相は国際協調を優先してロンドン海軍軍縮条約に調印した。これが「統帥権の干犯」であるとして首相が軍部から非難を浴びるなど、軍部と政府の間で軋轢が生じ始める大きな要因となった。それに伴い、政治の二面化が進み、大陸進出政策の方針の違いから、軍部と政府の対立がより深まり、五・一五事件や二・二六事件の発生を招いた。国民の救済政策に関して決め手に欠ける政府に対し、軍部は新聞社やラジオなどのマスメディアを駆使して満州での戦況報告を行い、満州事変の事実を歪曲して国民に広く伝達するなど、国民の軍部への期待感を高めていった。そうして国民の生活を救うための占領政策としての大陸進出という大義名分が成立していく。世界的に見れば、ワシントン体制に反する「侵略行為」を行う日本ではあるが、日本国民から見れば、国民生活を守るための「自衛行為」となるため、戦争への応援、「国家総動員法」などの協力体制が出来上がっていくことは容易であった。時は同じくして、ドイツも第一次世界大戦で敗戦したことにより、植民地のない国として経済の悪化に苦しむ国民の希望の光として、ヒトラーが登場した。国民のための政策を行う一方で、着々と国民の支持を得て、国民の対外戦争への肯定感を高めたヒトラーの手法と日本の軍部の政略は相通ずるところがある。実際に、日中戦争やドイツのフランス侵攻は序盤に快進撃がみられ、国民の協力をもって躍進した。しかし、イギリスやアメリカなどの経済大国の援助によって力を得た中国やヨーロッパ諸国の抵抗により、戦争が長期化していった。そうなると、植民地や資源の少ない日本、ドイツは不利な状況に追い込まれ、さらにアメリカは対日石油輸出禁止という手段を講じて、日本の譲歩を求めた。日米交渉決裂の末、真珠湾の奇襲に至り、日本は世界を敵に回し、開戦に踏み切った。結局のところ、世界恐慌で対応しきれず、「国民の貧困」や「経済の停滞」を生んだ国と、恐慌対策が成功した国との間の軋轢、そしてブロック経済を例とする「相互協力」の考えが欠如した表面上の「国際協調」が、第二次世界大戦や太平洋戦争の勃発につながったと捉えることもできる。「自国中心主義」「孤立外交」とせず、現代のように国相互の経済協力や国際的支援が十分に成されていれば戦争の惨禍は防ぐことができたのではないか。したがって、第二次世界大戦の惨禍を学ぶことは、次単元の日本の目覚ましい戦後復興や国際協力、公民的分野の政治参画の意義について考察する題材として有効な単元である。

そこで、本単元では「第二次世界大戦が起こったのはなぜか」ではなく、第二次世界大戦をあくまでも例として諸事象からこの時代の特色を多面的・多角的に考察できるように、単元を貫く学習課題として「世界大戦が繰り返される時代とは」という形で生徒に提示する。そして、毎時間の授業の中で取り扱う事象と、現代の諸事象との類似点について考察する時間を確保していく。最後に単元のまとめでは「大西洋憲章」を読み取らせて、「世界全体としてすべきだったことは何だったか」といった視点をもたせたうえで、「世界大戦を繰り返したこの時代の特色」について既習事項を用いて議論し、ギガタブを用いてスライドショーに時代的特色をまとめさせる。また、戦争を他人事と捉えないように、戦争が起こった様々な要因をふまえて、現代の時事的話題を取り上げて当時との時代的特色の類似点を洗い出すことで、今もなお戦争が繰り返される要素があることを認識させる。このようにして、単元の中で現代の事象と重ね合わせる活動の中で、平和的な社会の実現に主体的に関わる姿勢を育むことができると考え、本単元を設定した。

本時においては、戦時下の空腹に苦しむ人々の様子や、竹槍訓練を余儀なくされた国民間の同調圧力に焦点をあて、勝利を信じて我慢を強いられる国民がいたことを紹介していく。その中で、戦時の国民生活の様子を他人事と捉えないよう、戦争に協力していく当時の国民とコロナ禍における自粛生活を送る現代の我々の生活とを重ね合わせていく。また、戦況を報道する新聞記事を読み取らせ、マスメディアに踊らされる国民の過ちの部分に着目させる。そして、国民も戦争の加担者になり得る可能性に気付かせることを本時の目的とし、戦争の惨禍を再び繰り返さない国民としての意識の醸成を図ることとしたい。

3　単元の目標

（1）日本が太平洋戦争へと突き進んでいく過程を理解し、戦争と時代的特色のつながりを図示できる。（知識及び技能）

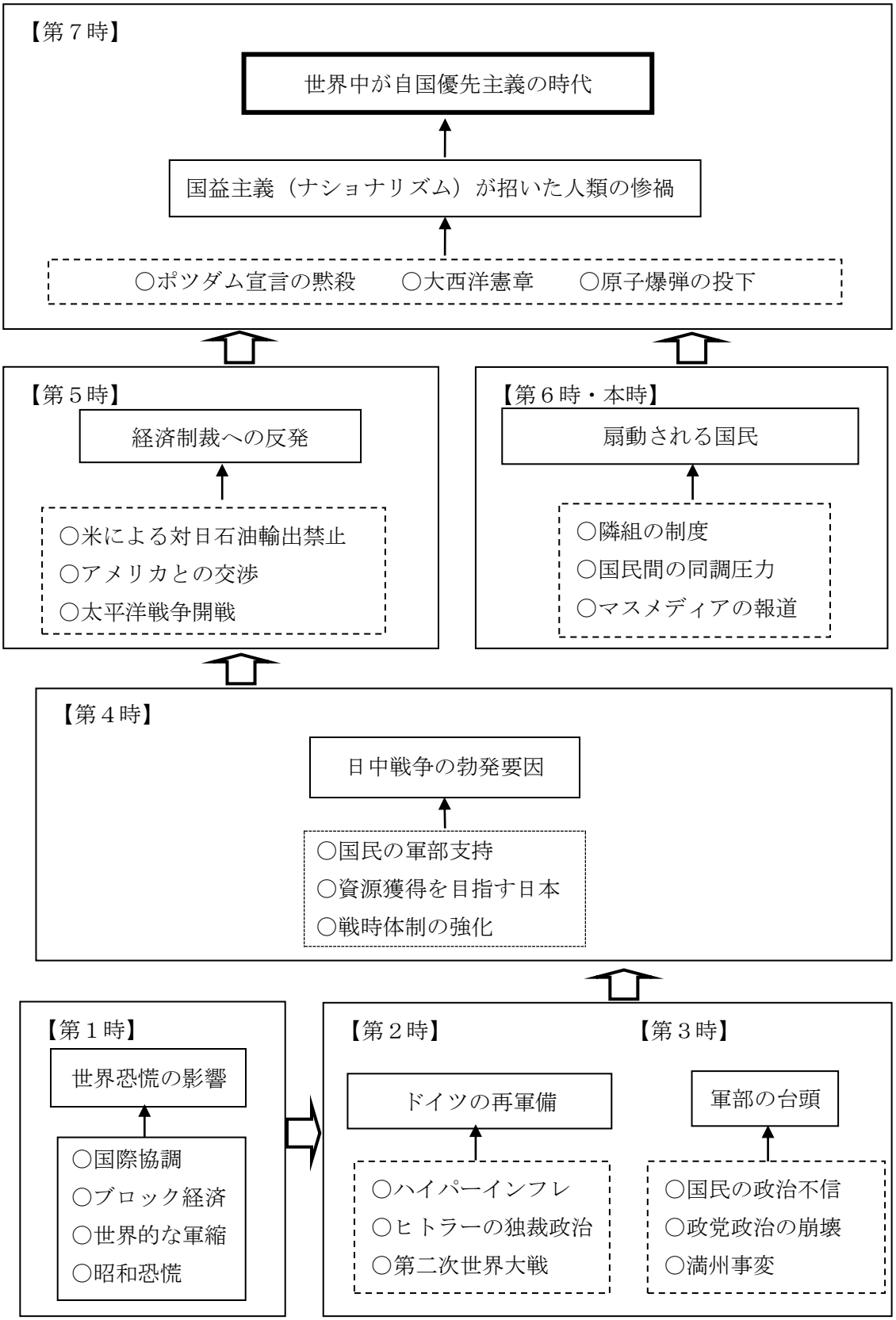
（2）世界恐慌後の国際情勢や国民の行動の変化に着目して、世界大戦が繰り返された時代的特色を、多面的・多角的に考察している。（思考力、判断力、表現力等）

（3）世界大戦が繰り返された時代的特色をふまえ、戦争の惨禍を繰り返さないように世界全体、個人として何ができるかを考え、主体的に社会に関わろうとしている。（学び向かう力、人間性等）

4　評価規準

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
日本が太平洋戦争へと突き進んでいく過程と、その要因となる出来事への理解を深めている。さらに、戦争と時代的特色のつながりを図示できる。	資料の読み取りや習得した知識を用いる中で、複数の社会的事象を結び付け、この時代の特色を考察することができる。	第二次世界大戦といった戦争の歴史から、戦争が勃発する根本的な原因を考え、戦争の惨禍を繰り返さないために自分に何ができるか考えようとしている。

5　思考の深化に対応した単元の指導計画



6　本時

（1）本時の目標

・国民が生活を犠牲にして戦争に協力した理由を、多面的・多角的に考察することができる。

（思考・判断・表現）

（2）本時の「主体的な学び」

①【戦時下の食料】

豆類の皮、みかんの皮など普通なら食べずに捨てるものまで食糧となっていたことを知り、食糧などの重要な日用品が戦場に優先されており、我慢を強いられている国民と現代の我々の「自粛生活」を照らし合わせて共感させる。

②【漫画　はだしのゲン１巻　竹槍訓練】

この漫画の一部分を、生徒に配付するワークシートに載せる。この部分は竹槍訓練に強制的に参加させられている主人公「ゲン」の父と、訓練を強要する町内会長の言い争う場面であることを説明し、「非国民だ」とゲンの父を糾弾する人に着目させ、当時の国民の中には竹槍訓練の実施に「同調」する者がおり、国民の間に「同調圧力」があったことを読み取らせる。

（３）本時の「対話的な学び」

②【ガダルカナル島の戦況に関する新聞記事】

新聞記事に書かれている「猛攻」「米との激戦」から、「日本がアメリカと互角に渡り合っている」と新聞が報じたことを読み取らせる。さらに、「ガダルカナル島の戦い」の結果をギガタブの検索サイトで調べさせ、新聞記事から伝わる戦果と現実の戦果との大きな違いの理由を考察させる。それをふまえて、戦時下の国民の過ちをギガタブのジャムボードにまとめさせる。

迫壓を敵のンモロソ力協軍海陸

敵艦船十五隻を屠る

ガダルカナル島 海軍部隊晝夜の猛攻

わが戰艦率先突入

陸軍部隊、上陸を敢行

僻遠の群島に米軍と激戰

南に北に鐵の堅陣

（４）本時の展開

過程	学習内容と活動	留意点（○）及び評価（◇）
導入 5分	○教師の発問に答える。 予想される反応 ・ない ・ミカンの皮は食べてはいけない	○大型テレビに、「ミカンの皮、とうもろこしの芯、枝豆の皮」を映す。 発問：「これらを食べたことがあるだろうか」
	○「国民の衣食住の様子」を見て、国民が我慢を強いられていたことを理解する。そのうえで、自分たちは現在我慢を強いられている場面はないか考え、発表する。 主体的①	○大型テレビに当時の衣食住の様子を画像資料として映し、国民が戦争によって衣食住で我慢を強いられていたことを強調する。 発問：「今私たちが我慢を強いられていることは何かありますか」
	予想される反応 ・マスク生活 ・学校行事の制限 ・旅行に行けない	○自由に発言させ、当時の国民と自分たちを照らし合わせ、我慢が多い時代であるという点は同じであると話す。

	○本時の学習課題を確認する。	○ワークシートを配付し、本時の学習課題を提示し、現代の私たちの生活と比較しながら考えるよう方向性を示す。
	学習課題　なぜ生活を犠牲にしてまで国民は戦争に協力したのだろう？	
展開 35 分	○中沢啓治作の『はだしのゲン』1巻の竹槍訓練の場面を読み、当時は町内会長のように戦争に勝てると信じて真剣に訓練に励んだ人がいたことを知る。 主体的② 予想される反応 ・周りの声 ・国からの圧力 ・新聞記事 ○ギガタブに載せられている新聞記事を読み、「ガダルカナル島の戦果」の内容を読み取る。 予想される反応 ・米軍と互角 ・日本が頑張った ○ガダルカナル島で日本軍がほぼ全滅だったことを知る。 予想される反応 ・新聞社がもうかるため ・政府の指示	○漫画を読ませる中で、登場人物「町内会長」「ゲンの父」だけでなく、「町内会長に同調する者」に着目させ、「隣組」制度による、国民の間の同調圧力について説明する。 発問：「町内会長が日本の勝利を信じる根拠は何だろう」 ○ワークシートに考えを記入させ、発表させる。手が止まっている生徒には、個別で考える視点を助言する。 ○ギガタブのクラスルームに載せた新聞記事「ガダルカナル島の戦果」を読ませて、当時の国民は新聞を通して戦争の状況を把握していたことを説明する。 発問：「この戦いの結果はどうなったでしょう？」 ○自由に発言させる。その後、この戦いの結果を、ギガタブの検索サイトで調べるよう指示する。 発問「なぜ新聞記事は勝っているような内容で書かれていたか」 ○自由に発言させ、当時の国民が、政府によって内容操作された新聞記事の内容を信じ込んでしまっていたことを説明する。

	○当時の国民のそれぞれ良くなかったところを個人で考え、その後、周囲と話し合う。その後、ギガタブのジャムボードに自分の考えを付箋で貼っていく。 対話的 予想される反応 周りに流されたところ 周りの目を気にしたところ 長いものに巻かれたところ 簡単に騙されたところ 戦争に関する知識がなかったところ	○今日の内容をふまえ、当時の国民の過ちについて考えさせる。国民が悪いと認識しすぎないよう、あくまでも国民は戦争に巻き込まれてしまったと補足説明する。 主発問：「当時の国民の良くなったところを挙げるとすればどんなところか？」 ○付箋は１人複数枚貼っても良いこととする。 ○付箋の内容を見て、似たような内容ごとに１か所にまとめるよう指示する。
	○評価カード（配布済）に、付箋の内容をふまえて、 国民が生活を犠牲にして戦争に協力した理由を文章でまとめる 予想される反応 ・新聞記事によって、国民の戦意が高揚したため。 ・新聞記事を読んで、アメリカに勝てると思っていたため。 ・竹槍訓練でアメリカに勝てると思っている場面から、国民は戦争に関する知識がなく、協力するのがあたりまえだと思っていたから。 ・同調圧力によって、仕方なく戦争に協力していた部分もあると思うが、国民自身も自分で考える力が足りていなかったことも大きいと考えた。 ・マスメディアを信じ込むくらい国民に心の余裕がなくなってしまったからではないか。	◇国民が生活を犠牲にして戦争に協力した理由を多面的・多角的に考察することができる。 （思考・判断・表現） ○机間巡視を行い、よく記入できている生徒を確認し、発表させる。

まとめ 10分	○第二次世界大戦を起こしたドイツが、二度と戦争を起こさないよう国民への平和教育を徹底していることを知る。 ○評価カードに本時の感想を記入する。	○ドイツの中学校では、国民が二度と戦争に扇動されないよう、第二次世界大戦の学習を半年かけて行っていることを紹介する。 ○学習課題への到達度について、自己評価をさせる。

（５）評価

・国民が生活を犠牲にして戦争に協力した理由を、多面的・多角的に考察することができる。

（思考・判断・表現）

	基準(standard)		
評価規準	A	B	C
国民が生活を犠牲にして戦争に協力した理由を、具体例を用いて多面的・多角的に考察することができる。	★ワークシート回収 国民が生活を犠牲にして戦争に協力した理由を、具体例を用いて多面的・多角的に考察することができる。	★ワークシート回収 国民が生活を犠牲にして戦争に協力した理由を、具体例を用いて考察することができる。	★ワークシート回収 国民が生活を犠牲にして戦争に協力した理由を、具体例を用いて考察していない。

（６）板書計画

６、戦時下の人々

なぜ生活を犠牲にしてまで国民は戦争に協力したのだろう？

太平洋戦争の開始

→国民の衣食住がより苦しくなった

↓

戦場へ

生活を犠牲

竹槍訓練

隣組の制度

偏った新聞報道

・国民間の同調圧力

・国民の知識不足

・正しい判断ができなくなっていることが戦争に協力している理由

7　思考の構造図

【事実的認識の第３段階】
世界的に国同士の協力体制が欠如し、各国が自国の利益を追求した時代であった。

【事実的認識の第１・第２段階】

A　第一次世界大戦の勝利国のイギリスやアメリカなどが自国繁栄を優先していったことで、世界恐慌以後、日本やドイツなどといった不況に苦しむ国家との経済格差がより一層進んでしまった。

a　世界恐慌の対応策として、イギリスやフランスといった植民地などを多く有する国は大きなブロック経済圏をもち、日本など植民地以外の国との交易を絶った。
b　ドイツは第一次世界大戦後の賠償金の支払いが負担となり経済が混乱していた。
c　ブロック経済の影響により、日本は外国への輸出に依存した経済発展が見込めなくなった。

B　日本、ドイツ、イタリアの枢軸国は、アメリカやイギリスなどの連合国と異なり、植民地が少なかったことから侵略行為につながっていった。

a　アメリカは海外の紛争や諸問題に巻き込まれるのを避け、孤立を保とうとする外交政策をとっていた。
b　イタリアでは、経済の行き詰まりからエチオピアを併合するなど国際協調に反する動きを取り始めた。
c　ドイツは経済政策により、国民の支持を集めたヒトラーが独裁体制を築き、他国への侵略戦争の準備を進めていた。
d　日本は満州国を傀儡国家とするなど、ブロック経済圏を広げようとした。

C　世界恐慌によって国民の生活が苦しくなり、対応に行き詰まった政党政治への不信感から、国民も軍部に同調するようになっていった。

a　日本では、農村の大凶作や都市の失業者問題が重なり、国民は政党政治の無策に不満を持ち始めていた。
b　国家総動員法の成立によって、国民生活はあらゆる面で戦時体制に組み込まれていくことになった。
c　「欲しがりません　勝つまでは」といった戦意高揚のための標語が国民の間でさかんに作られていた。
d　国による情報統制によって、国民はマスメディアに踊らされてしまった。
e　多くの国民は、隣組の制度により国民相互が監視し合い、貧しくとも戦争のために我慢、自粛を強いられていた。